

ウィルバー ホロンの破れ＝自己の二元的分裂

宇宙と世界がホロンの構造をとっていけば、どの次元にも秩序だった平和な世界が存在するはずである。しかし、そうであればどの次元にも対立、矛盾、運動というものが生まれてこない。二元的な分裂が運動を引き起こすのである。われわれの現実の社会や人間において対立や抗争が渦巻いていることは周知のことである。

ウィルバーは、初期の著作『意識のスペクトル』で、人間が二元的分裂のなかに置かれていく過程を考察している。自然からの身体的自立（原初の二元論）、身体の生と死への分裂（第2の二元論）、精神の肉体からの自立＝知・象徴の世界の成立（第3の二元論）、精神の内部の分裂＝仮面と影（第4の二元論）を説いている。この二元的分裂は幻想（マヤー）とも言えるが、これを克服してこそ、人間は永遠無限＝究極存在への還帰を高いレベルで果たすのである。

ウィルバー ホロンの破れ＝自己の二元的分裂 （文責：岩崎）

ウィルバーは初期に『意識のスペクトル』（1972年）を著し（吉福他訳、昭和60年、春秋社）、人間とその意識が二元的に分裂していく過程を考察している。

まず、原初の二元論。人間は大自然のなかで、植物や動物が生きているように生きていた。外敵から身を守りながら、食物を探し採集・狩猟して生きていた。そのなかで、自分たちが大自然の環境から独立した身体を持っていることに気がついていった。人間が集団で狩猟をするなどの過程がそれをうながしたのであろう。夜と昼、男と女、天と地、内と外という二元的分裂が意識されるのである。そして、自分たちと環境のあいだに距離が生じ、人間が個体であるといういわば「実存的自覚」が生じ、実存と環境の間の隙間が「空間」として創造されるのである。

次に、第2の二元論。個体としての実存的自覚が自分の個性性に強く向いていくと、そこから、自分たちが「いる」と「いない」との違いに気づいていく。生と死、存在と非在の二元的意識である。行動を共にする家族たちの死が認識され、埋葬や花を供えることが始まる。また、生と死の一体性の崩壊は、実存的恐怖、生と死の戦いをもたらす。ここにおいて、永遠の現在に失われ、「時間」が創造されるのである。

「空間」と「時間」の創造により、人間は下半身が獣、上半身が人間という「ケンタウロス」的な実存となるのである。

さらに、第3の二元論。生と死の厳しい戦いのなかから、有限・無常の身体を超えて永続性を求める観念の働きが展開する。観念は、無数の明日を結晶化させ永続性＝不死を生みだす。ここにおいて、精神は肉体から自立していき、あるいは「身体からの逃走」が生じ、「私は肉体を持っている」という表現もなされるのである。

こうして、二元的分裂は、「自我」を生みだし、二元それ自体を認識する、象徴、線型、空間、時間などの知の様式を獲得するのである。人間は象徴的動物（カッパ）となり、本能の満足を象徴的な満足で代用するようになる。また、そこには「(生物)社会」が形成され

ていき、①言語、信念、神話、コミュニケーションが生まだされ、②自己対他者という二元論が固定され、③抽象的知性の貯水槽が形成され、④役割、価値、立場などの社会的観念が発展する。

そして、第4の二元論。ここではさらに、自立した精神の内部に「仮面」と「影」の分裂が生じる。人間のコミュニケーションは、メッセージ（言葉）を伝達するが、しだいにメッセージ（言葉）についてのメッセージが生まだされ、過程は事実によるメッセージの拘束とメッセージによるメッセージの拘束という「二重拘束」状態を来し、コミュニケーションに混乱、もつれ、歪みが生じていく。こうして、精神の統合性は破れていき、コミュニケーション過程で他者から与えられる拘束によって自己はとらわれていき、それに合わせた「仮面」をつけるようになる。しかし、それによって規定される自己の姿は自分の心身の全体を正確に表さない貧困化した自己イメージ（仮面＝自我）であり、見離され、疎外された自我の局面が「影」となって仮面の背後に蓄積していく。その影はまたひるがえって他者に投影され、自己と他者の関係性はさらに相互に疎外的なものになっていく。

現代の人間が陥っている精神統合失調（引きこもり、心身症、対人恐怖症など）はこの段階の二元論を表現している。

このような厳しい二元論的な分裂と、一方で存在そのもののホロンの、ホリスティックなあり方との間にどのように架橋していくのかが、人間の大きな課題となっていくのである。二元論を乗り越える方向は「非二元」にある。それは単に無自覚な大自然（宇宙）との一体性（一元）にあるのではない。それは、草木や動物の世界である。意識性をもった、究極の存在への想到・融合が「非二元」として求められるのである。